

I 研究主題

特別支援学校(知的障害)における自立活動の指導の検討～自立活動と各教科等の指導の関連付けに着目して～
香川県立香川西部支援学校 教諭 船橋奈生子

II 研究の目的

特別支援学校(知的障害)における自立活動の指導は、各教科等を合わせた指導を含む柔軟な指導体制を構築することが可能であるとともに、自立活動の指導と各教科等との関連の明確化に係る課題が示されてきた。本研究では、1年次において、児童生徒一人一人の学習上又は生活上の困難を踏まえた実態把握、自立活動の指導における「中心課題」の抽出、各教科等においても踏まえるべき「指導の方向性」の教員間の共通理解、各教科等における手だて・配慮の検討に係るプロセスについて検証し、①困難の背景を探る実態把握、②「指導の方向性」を踏まえた手だて・配慮の共通理解、③自立活動及び各教科等それぞれの指導上の課題を整理して還元する改善のサイクル構築の3点が重要であることを明らかにした。この点を踏まえ、2年次は、自立活動と音楽「器楽合奏」を基に実態把握からのプロセスを検証し、自立活動と各教科等の関連付けの在り方について検討する。

III 研究の方法

(1) 事例生徒の実態把握

A 特別支援学校(知的障害) 中学部(以下、A校) 在籍生徒(以下、B) の日々の姿や保護者や前担当教員の情報等より、自立活動の内容6区分27項目の観点で実態把握を行い、困難の背景を実践・研修を通して検討する。

(2) 自立活動の時間における指導と各教科等の配慮事項の検討

実態把握を基に中心課題を抽出し、自立活動の時間における指導(以下、時間の指導)の指導目標及び指導内容の検討とともに、指導の方向性に基づく各教科の手だて・配慮の共通理解を図る。

(3) 授業実践(音楽「器楽合奏」)

器楽合奏における指導計画を立案し、Bの自立活動の指導を踏まえた手だて・配慮との関連を検討する。

IV 結果及び考察

(1) Bについて

アルファベット等の文字に興味がある。好きなキャラクター等の名称・聴きたい歌・欲しいもの・行きたい場所等を発語・身振り・写真等で伝える。集団指導に参加し、簡単な手順を理解し自ら活動できる。

(2) 自立活動の検討の概要

表1のプロセスで検討を実施した。校内研修①(実態把握)において、学習上又は生活上の困難や得意な面の背景について、複数の教員の視点で意見交換し考察を深めた。背景を踏まえ実践するなかで中心課題が定まり、自立活動の内容6区分27項目と照らし合わせて指導の方向性を導き出し、時間の指導の指導内容や各教科等における手だて・配慮の共通理解を図ることができた。校内研修②(中心課題)では流れ図でプロセスを整理した。

表1 自立活動の検討のプロセス

困難の背景	味覚や触覚、視覚的な感覚の鋭さ等の特徴により、食生活や様々な生活経験を広げることの難しさ		
中心課題	生活習慣を整え、得意な文字と物事等を一致させながら様々な経験を積み重ね、集団で学ぶ力を育てる。		
指導の方向性	生活習慣の基本的な力を育てる	1 健康の保持 (1) (3)	5 身体の動き (1) (3)
	言葉と物事を結び付ける	2 心理的な安定 (2)	4 環境の把握 (1) (3) (4)
	気持ちの表出方法を身につける	3 人間関係の形成 (1) (3) (4)	6 コミュニケーション (1) (3) (4)
指導内容	イラストのマッチングや選択、文字ならべ、色の弁別、集団ゲーム、線なぞり		
各教科等における手だて・配慮	・ワークシートの文字と文字シールのマッチング	・座る姿勢の助言	・文字を使用した教材提示
	・様々なものから選択する活動経験	・トイレでの排せつを促す	

(3) Bの自立活動と音楽(器楽合奏)との関連

上記を基に器楽合奏の指導との関連を検討した。Bを含む学年団の実態を踏まえた楽器編成や編曲と指導計画、並びに指導目標を立案し、アルファベットによる曲進行の提示、手元用カード、楽器の選択場面等、Bの自立活動を踏まえた手だて・配慮を設定した。Bは友達の演奏を聴きながら、担当箇所を楽器を選んで演奏し、その楽しさや音色の心地よさ、奏法を学んだ。実施後は、より主体的に楽器を選択して演奏できる環境と楽器の再検討、より良い演奏に向けた合奏指導の工夫について再検討するとともに、楽器や曲の名称とその文字との一致や演奏を通じた身体の使い方の工夫等が必要であることから、自立活動の指導の改善に向けた学びの基盤として重要な事項は、各教科を通して学んだ事象と文字の一致、様々な姿勢をとるための体づくり等であることを明らかにした。

参考文献：文部科学省(2018) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(幼稚部・小学部・中学部) 開隆堂出版。